幼稚園における「木工」に関する研究　－その２－

清　原　みさ子

はじめに

本論集第52号では、手を使い道具を使って作る活動の一つであり、作って遊ぶ上で重要な位置を占めている「木工」の指導に関して、日本の幼稚園に「木工」が紹介され、取り組まれ始めた1910年代終わりから1920年代の様子を明らかにしてきた。

本稿では、東京女子高等師範学校附属幼稚園で取り組まれた「誘導保育」を中心に体系化した『系統的保育案の実際』が出された1930年代の状況を中心に、「木工」に関してどのようなとらえ方がなされていたのか、また幼稚園でどのような取り組みが展開されていたのか明らかにすることを目的とする。ここでも前号同様、幼児にもできる金槌で釘を打ったり鋸で切ったりして作る活動を「木工」と呼ぶ。

1.「木工」に関する記述

1930年前後から1940年にかけて、幼児教育・保育に関する著書が何冊も出版され、その中には手技についてのものも含まれていた。1929年に出版された『学校家庭手技及手工教材』[1]や1935年に出版された『最新手技資料と其扱法』[2]がこれにあたる。これらの中では、作品とその作り方が紹介されているが、「木工」に関することはほとんど取り上げられていない。木を材料とした製作例は、前者では木製糸巻芯を利用したもの、後者では３例のみで、そこで上げられたり用いられたりしている道具は小刀、小鋸と錐で、金槌は使われてはいない。この２冊の著者は、藤五代策と横井曹一である。藤は東京女子高等師範学校の、横井は奈良女子高等師範学校の教員で、保育関係の夏期講習会等でも、手工関係の講師をしていた。

1930年に出された木下一雄の『幼稚園実際的保育学』には、「幼児の生活の中より手技の材料を考へるならば、大体次ぎの如きのもが得られるであらう。因に製作に要するものは任意に諸材料を併用させる方針から、常にクレヨンも粘土も紙も木片も竹も乃至鋏、小刀等まで用意して置くことが肝要である」[3]と述べられている。「木工」という言葉は出てこないが、材料に木片が上げられている。

1931年に出された『幼稚園の経営』は、奈良女子高等師範学校教授で附属幼稚園主事の森川正雄が著したものである。ここでは、手技の「材料の種類」として「積み方」「繋ぎ方」「排べ方」「貼り方」「摺み方」「織り方」「切り方」「組み方」「掛け方」「縫ひ方」「豆細工」「粘土細工」「木工」「黍幹細工」「実用作業等」[4]が上げられている。さらに、奈良女子高等師範学校附属幼稚園で実習中の教生が立案実施した保育案例を紹介している。その一つである「春日神社及参道附近（手技及描き方）」[5]には、種々の紙や黍幹、粘土等とともに木工も取り入れられている。

1932年に出版された東京女子高等師範学校附属幼稚園の及川ふみによる『幼稚園の手技製作』にも、「木工」につながる活動はわずかしか記述されていない。「動物のそり」のところでは、「木きれや、（木箱の蓋や、ベニヤ板）ボール紙（ボール箱の蓋）などに図の如く横になる部分を二枚と上の板一枚とを形とつてミシン鋸か或は鋏できりおとしてそりをつくる」[6]と記されている。

パティ・スミス・ヒルの *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade* が訳されて『コロンビヤ大学附属幼稚園及び低学年級の課程』として出されたのは、1933年である。「木工」に関しては、材料や用具、代表的活動等について記述がみられる[7]。

材料の木材は、「柔かな松の板で厚さ半吋。長さ巾は種々」「車軸及テーブルの脚にする木棒」「車輪」等で、設備品は「金槌－中位の大きさ第三号（釘抜き附）」「鋸－横挽、縦挽、挽廻、胴付」「留定規」「ハンドル付栓錐」「手万力」「作業台」「尺」「捩子廻」「錐」「サンドペーパー」「絵具刷毛」となっている。「代表的動作行動」としては、「二ノ組」で「極く僅か丈する」とことわりがあり、「釘うち丈する」ことから「粗末ながらも製作品が出来かける」ことが

上げられている。「思考、感情及行為の向上」で「道具を弄る事と試作の興味が出る」「音と運動に対する愉悦」「筋肉の適当な使用に就ての考へが進んで来」て、「道具の使用法」「安全に道具を使ふ事」「適当な道具の持ち方」「釘を打つのに真直に打つ事」「道具の仕舞ひ方」を習うとされている。

この上の「三ノ組」では、「単純な家具。（人形の寝台、テーブル。椅子、長椅子等々）」「動くもの。（四輪車。一輪車の押車。二輪車、舟。ブランコ等々。）」「必要品（箱。本立て。本棚、状差。額縁、等々）」を作る。また、「製作品に絵具を塗る」ことも行われる。「道具の名称と使用法」を習い、「道具の取扱方と使用に対する統制力が進んで来る」。具体的には、正しい姿勢をとり、適当な板と道具を選び、釘を真直ぐに打ち釘を抜く事もし、釘の大きさや数を適当に使う。「道具の取出し片付け」「掃除」に責任を持つことや、「材料を経済的に使ふ事を覚える」「製作品に対する愉悦（子供が使へる程度の大きさの物なら一層喜ぶ。例へば、大きな荷車）」も含まれる。「木目につれて彩色する」「一様に塗る」「刷毛の適当な握り方」「衣服や床にペンキを、つけない様にする」ことを習う。

「低学年級」では、「殆ど幼稚園に於ける動作行動と同じであるが、製作品の完成に一層興味がある」となっている。この組では、「自分の作業を計画する能力」「暗示を用ひる能力」「技術の能力」を増し、「数や測定を一層確然と応用する」ことが、「思考、感情及行為の向上」のところで上げられている。

このコロンビア大学附属幼稚園の「木工」に関しては、雑誌『幼児の教育』にもしばしば記述されている。第31巻第７号と第９号で宇佐美敬が紹介した記事から、保育室に「大工用台」や「大工用万力」があり、「押し車」を作っていたり、「荷車」や「飛行機」を製作していたことがわかる[8]。第36巻にも、このニューヨークの幼稚園の様子が紹介されている。「作業教育、特に木工に力を入れて、大保育室の片隅に、木工用の相当の機械設備」があるという。共同作業によって、大きなものを製作するというふうで、汽車の写真が掲載されている[9]。

1934年に出版された堀七蔵による『幼稚園保育の諸問題』では、「第二十三保育項目にある手技」[10]のところで、紙細工や色板並べ、豆細工、粘土細工等と

ならんで、「木工」が取り上げられている。堀は、東京女子高等師範学校附属幼稚園の主事を1924年から1930年までやっていて、幼稚園の状況を知っていた。本論集第52号でふれた座談会で、「木工」のところでも積極的に発言している。この著書でも、附属幼稚園の写真を多数載せ、実際的な保育について述べている。「木工」に入る前に、堀が手技の目的をどのようにとらえていたか、簡単にみておきたい。手指を使っていろいろの作業をし、面白く遊ぶことの出来るもので、幼児が活動本能を満足すればよいとしている。手技は活動欲だけでなく「幼児の発表欲、製作欲を満足せしめることが出来る。発表し製作することによつて、幼児の観念が明白となり、幼児の感覚器官が発達し、殊に手指の筋肉が発達するものである。事物の観念を発表せんとして、種々の工夫が行はれ、製作する間に幼児の創作工夫が進歩するのである」[11]と述べている。このような目的を達成する活動の一つに、「木工」がある。

「木片や板を使つて簡単な物を組立てさせる作業は、幼児にも喜んで行はれる」もので、「自分の指を打たないやうに、釘を打つ努力だけでも大変な教育的価値がある」という。「殊に共同製作をなし、その出来上がつたものを使用して、いろいろの遊びが出来るときの幼児の喜悦は、実に喩へやうがない」とその価値を強調している。「大きなものを製作するときには、保姆と幼児との共同製作であつてもよい」が、「常に幼児が自発的に活動し、幼児が努力して作業する」ようでなければならないという[12]。

1935年に出版された東京女子高等師範学校附属幼稚園の『系統的保育案の実際』には、「最近数ケ年に於ける各組の実際を材料とし、取捨を加へ、配合を変へ、一つの保育案として組み立てゝ見た」もので、「附属幼稚園の保育の現行のまゝではない」[13]と述べられているが、附属幼稚園で行われていたことが反映されているので、「木工」についての記述がみられる。

「年長組・第二保育期」の「誘導保育案」で、「人形の家」の主題のところに「幼児に出来る程度の木工を手伝はしめ、カーテン、テーブル掛、敷物、クッション、衝立、額、時計、植木鉢等を作らせる」[14]という「計画」が書かれている。「第三保育期」の「誘導保育案」にも、「動物園」の主題のところで「話合ひより誘導して動物園をつくることを相談し蜜柑箱、石油箱、サイダー箱、釘

樽等を利用して特に大型の動物をつくり、最後に動物園として全幼稚園の観覧に供す」ことが計画され、「期待効果」の一つに「木工」が上げられている[15]。

1939年に出された松石治子の『実際保育の要領』には「手技教材分類表」[16]が載せられている。そこには、種類として「折紙」「切紙」「貼紙」「やぶり紙」「織紙」「組紙」「画き方」「図案」「粘土細工」「きびがら細工」「豆細工」「つなぎ形」「厚紙細工」「木工細工」「自然物」が上げられている。「木工細工」の「製作法」として「細かい木片等を利用して立体的なものを作つたり、薄い板に絵を画き保姆がくりぬいて彩色させる」と説明されている。

1938年の雑誌『手工研究』には、齋藤金造の「幼稚園に於ける木材中心の手技に就ての一考案」[17]が掲載されている。「幼稚園の手技なるものと小学校の手工とは最も密接なる関係を有し、尋常一二年あたりの手工は幼稚園の手技と殆ど変りがない位であるに拘はらず、従来手工科の研究者は、一歩後を振りかへつて見て、手技の研究に手を染めて見る人はなく、全然保姆の先生達に任せきりであるかの観あることは甚だ遺憾」とした上で、「従来一般に行はれて来た幼稚園の手技を概見すると、折紙、粘土、織紙と云つた様な、半ば遊戯的ではあるけれども、多くは繊細軟弱な技術に限られて居る」という。そして、「就学年齢に最も近い程度の幼児などに対しては、いま少し手技の種類を吟味して見て、彼等のより満足する如きことをやらせるのがよいのでは」ないかとして、アメリカの幼稚園視察で興味を感じた「木工」を提起する。幼児でも出来る程度のものにすれば、「材料が紙や粘土よりも遥に堅牢である上に、作品は直に遊戯の際の材料として利用するに都合よく、教育上意義深いものとすることが出来る」と主張している。幼児が使う用具としては、鋸と小金槌、材料は「杉、蝦夷松、樅の如き軟質の木材を以て作りたる大小の木片」と「折箱の古材、蜜柑箱の古材又は紅屋板等を利用し、接合材料として釘を使用」させるという。「幼児の発育程度に伴ひ、大体四段階に分けて遣らせる方がよい」として、「数個の単形の木片を使つて或形体を組立てることから出発」して、だんだんに数を増やして複雑な形に進み、最後は、様々な材料を自由に混用させ、自由に作業させるのが良いという。「時には遊戯的に二三の幼児が組になつて、仕事をさせる方法も大変よい」と述べている。

2. 幼稚園における「木工」の様子

雑誌『幼児の教育』には、前号で取り上げた1929年の座談会以後にも、東京女子高等師範学校附属幼稚園での「木工」の様子が、しばしば紹介されている。

『幼児の教育』第32巻第5号には、菊池ふじのの「人形のお家を中心として」[18]という実践が掲載されている。前年の暮に買った人形で遊んできた幼児たちに、人形のために無いものを作ってあげましょうと保姆が呼びかけ、それまで人形と遊んでいた幼児たちから、布団、机、椅子等が出されたが保姆の考えていた家はでてこなかったので、「先生はね、このお人形さん達のお家を拵へて上げ度いの」と話すと、幼児たちが賛成して始まったという。「お家は、お人形のお家であると同時に、又子供達のお家としても遊べる様にと心掛けてもくろ」んだので、かなり大きな家を作っている。少し長くなるが、その様子を見ていきたい。

骨組みだけで置いておくのはかなり不安定だったので、大急ぎで床を張るが、そこでは保姆が長さを図って線を引いた床板を切る事と釘を打つ事を子どもたちはしている。

窓のところでは、「窓をくり抜く事も、硝子を張る事も、一寸小細工な、又、安材木だけに、もろくて細心の注意の要る所でしたので、子供達には、戸をはめる時の蝶番のねじ鋲を、止めてもらつた位に過ぎません。でも子供等は、ねじ廻しを使ふのが一寸変つた仕事でしたので、競つて手伝ひ、又、案外上手に、ねじ廻しをまはして止めて居りました。尤も、鋲を止める穴等は、私共が予め金具に合せてきりで穴をあけて置いた」と記述されている。

壁の部分は、保姆が長さをはかり、「板を切ること、打ちつける事は子供達で」やり、「一人が釘を打つ、他の二人位は、板を押へて助けて上げる。次ぎにこの人達が代る代る釘を打つたり、板を押へたりし合ふ嬉しげな顔、見て居る私までがたまらなく、嬉しくなる」と記されている。

天井は、子ども達の手の届かない所なので、切ることだけを子どもたちが手伝い、後は保姆がしている。縫い取りでカーペットを作ったりストーブの煙突や家具等は子どもたちが釘を打ったり、塗ったりして作っている。

1933年の第33巻第５号には、木の箱の蓋で札を作るのに鋸で切っている写真が載っている。翌年には、李王妃が参観した時の様子を倉橋惣三が紹介している。「各室とも幾つかの自由な『グループ』に分れて、いろんな仕事や遊びをして」いて、年長の「山の組」では、「遊戯」と「動物園の仕度 {大工仕事 動物色塗り」という記述がみられる[19]。

1935年には３月号に「大型の動物製作」[20]の様子が紹介されている。空箱を胴体にし、板に動物の顔をかき、それを「鋸ミシンで切りぬき」取りつけている。幼児たちは「みんなで代る代る鋸で切つたり抑へたり」「脚にする木を切つたり、釘で打ちつけたり代り代りに力一杯働」いたという。この取り組みのため、「部屋の一部に作業台を置き、大小色々の空箱、板、棒及び尻尾にする為の縄とか、針金、布等の材料と、鋸、釘、金槌、鉋等の道具は何時でもすぐに使へる様に用意いたして置くべき」だと述べている。

東京女子高等師範学校附属幼稚園以外でも、「木工」が行われていた。

1931年には、東京市竹町尋常小学校附属幼稚園の電車作りの様子が紹介されている。幼児たち自身が、どの程度「木工」をやったかはわからないが、材木を買って、外廓を作り、トロッコ４台を動かないように取りつけ、飾りつけて花電車にしている。約１ヵ月半かかったという[21]。

『幼児の教育』第37巻には、園医をしている幼稚園の様子を入れながら考えを述べた竹村一の「幼稚園を覗く」という連載がある。その(三)で、「夏休み前から、小さい小屋を作りました、保姆さんと、こどもと、小使さんと、みんなが大工になつて、板を運んだり、屋根をつくつたり、釘をうつたり、金鎚をたゝいたり、いろいろの仕事をして、やつと一つの立派な木造建築が出来上りました」「窓が両側に四つ位と出入口が大きいのが、二つあつて、中にはこどもの椅子が六－八脚ほどは入ることの出来る、それはそれは、立派な建築が出来上りました」と、小屋作りの紹介がなされている。この活動は、「こどもの悦びましたこと、打ち込む釘は、曲つても、ゆがんでは入り込んでも、時には金鎚がすべつて、指先を打つても、ペンキが手についても、それはそれは、よろこんで力一杯に働きました、汗を出して、汗をふいて、働きました」というように、子どもたちにとって魅力的なものであった。このような大工遊びは、青空

の下で、汗を流して、力を入れて大きな筋肉を働かせることになり、「健康への身体的精神的の訓練があるではないか」と竹村は考えていた[22]。

『幼児の教育』以外の雑誌等からも、「木工」の様子が窺える。

1936年6月に第1号が出された『基督教保育』を見ると、1938年10月の第26号に「懇談会二ツ－幼稚園に於ける経済－」が掲載されている。各幼稚園で経常費を少くする為実行している事を発表し合った中で、「木工は大工さんから木切れを貰ひ、襖屋から襖の引手を貰つて車にする」「木工は釘が高くなる為、今迄の様にあまり出来ない」という記述が見られる[23]。この話をしたのは、岡崎愛隣幼稚園の篠崎美津で、「木工」の地域的広がりが窺える。

1940年7月の第46号の「乳幼児に於ける手腕運動の発達（第二回）」の中で、「乳幼児に於ける手腕運動発達助長の必要と手段」の具体的例の一つに「木工」が上げられている。「力一杯釘を打つ、力一杯鋸を引く、こゝに筋肉の鍛錬がある。眼を強め、握力をも増す」ととらえられている[24]。これは東洋英和女学校幼稚園師範科の卒業論文の一つであるので、ここでも「木工」が行われていたと思われる。

1937年に創刊された『保育』の第39号に、「幼稚園の大工部屋」[25]が紹介されている。この幼稚園では、園舎と園舎の庇合を利用して3坪あまりの「大工部屋とでも云ふ作技場が出来て園児に極めて簡易な木工作業を始めて見」たという。この「木工作技場」は、「入口を入ると中央に作業台を置き部屋には板、角材、竹切れがうず高く積まれてゐる棚には標本及び用具が作業終つて園児の手によつて整頓さして列べて」あり、作業台の大きさは「巾　三尺」「長サ　六尺」である。用具は、作業台の「四角に取付くる木製万力及び金属製小形万力、鋸、横目、縦目、金鎚、鑿、鉋、錐、其他は小学校の手工用具の単なる程度もの」である。

「材料は総じて物資不足の現時局として有合の物を主材とし角材の如きも建築用材に不能の端木切れ板類は空き箱を利用し釘の如きも空き箱より抜き取りたるものを使用」したり、「小供の家庭に呼かけ木製菓子折の空き箱、蒲鉾板、うどんの箸等を主用材料とし女児も喜こんで作る簡易な作品に利用」したりしている。「作業は六名を以て一組となし作業長を定め始業交代終業の指揮をな

さしむ。又作業は総べて分業制とし二組を以て一つ作品の製作に当らしめ」るが、部屋の広さや作業台の数から、一度に多人数でやれないという制約があったと思われる。「基礎指導は何んと云つても一番大切なことで作技の生命であり出発でありますから誤らぬ様最善の注意を要するもの」で、その第一は姿勢であるという。例えば鋸で板を挽く場合に、「姿勢が悪るければ鋸は横に逸れるもの」で、「反対に姿勢が正しく直線を正視して鋸を手に軽く持ち前に軽く差し出し引くに力を込めて強く挽けば板は真直ぐにいやでも挽き切れる」ので、基礎指導が重要である。「姿勢を充分に教へ板切れ角材を直線に又は斜線に挽くこと金鎚の打込み方、万力の〆方、ハンドボールの使用方、順次組々に指導して一通り終れば作業台に標本を置き板や角材の材料に（デザイン）粗線を画き作業長に示して各自分業に作業を開始せしめ指導の先生は園児の自由に任せて成可く手を触れない」という。作るものは、「機関車、電車、戦車、軍艦、汽船、水屋、屏風、衝立、羽子板、俎板、小箱、机」等である。

この「木工作業」をやらせてみると、保姆をてこずらせたりする子どもも別人のようで、「脇目等してゐる小供は一人もありません。皆緊張し切つて指導の先生のお話をはいはいと一言も聴き漏らすまいと云ふ熱心振り」であり、それは「童心の索め」を満足させるからではないかという。「小供は画で見せるより形状で現示した方が満足するもので又其の現示した模型なりが更に動くと云ふことに全く満足するもの」で、「紙芝居とか、幻燈を見るより活動映画に一層興味を増す」し、「粘土の機関車、戦車、汽船、軍艦等を作るより一歩進めて木工により之等を木で作り車の動く実状、位置の変化する状態、水に浮き動く舟を作る等実体に近い物を自分で作らす」ことが「童心の索想に合致し満足さす」と考えたことが、「木工作業を始め」た理由だという。

また、横井曹一が『造形教育体系第三巻　造形教育教材論』の中で、「木工教授も厳格な意味でなければ、もつと低学年から実施し得る。考へやうによつては幼稚園でも行ひ得るもので、現にいろいろの板片を与へ、鋸と金槌で、いろいろの木工を幼稚園で自由にやつて相当の成績を挙げてゐる所も少くない」[26]と述べていることからも、「木工」に取り組んでいた園があることが窺える。

3. 幼稚園における「木工」の広がりと保姆養成の問題

幼稚園で「木工」を行う場合、東京女子高等師範学校附属幼稚園のように保姆も一緒に作るやり方もあれば、道具の使い方の基礎をきっちり教えて、後はなるべく自由に任せるというやり方もあった。保姆が一緒になって作ったとしても、大きなものが出来上がった達成感はやはり大きい。それが遊びに使える喜び、嬉しさは、計り知れない。その一方で、道具を使えるようになること自体が、幼児にとっては悦びであり、誇りでもある。どちらの方法にも一理あるが、いずれにしても、広く「木工」が行われていたとは言い難い。手技を保育に取り入れていない幼稚園はないといってもよい状況であったのに、そのなかで「木工」が広く取り入れられなかったのは、保姆の力量の問題があったと思われる。

保姆養成校に入る前に、小学校や女学校を終えるわけであるが、小学校の手工科は尋常小学校の４年もしくは５年から男女別になっている場合が大部分である。高等小学校では、女子にも簡易木工や金工が取り上げられているが、尋常小学校では、木工、金工とも女子の場合あまり取り上げられていない。そこでの経験が少ないとなると、保姆養成校に入学した後、木工をする機会があるかどうかが大きな問題となる。保姆養成の場で、木工はどのように扱われていたのであろうか。

広島女学校附属幼稚園保姆講習規則（1904）を見ると、「フレーベル恩物及用法」のほかに「手工」も上げられているが、その内容はわからない。1906年の広島女学校附属幼稚園師範科略則では、「フレーベル恩物並ニ手業ニ就テ理論的並ニ実際的取扱ヒノ研究」となっている。1912年に改正された広島女学校保姆師範科細則では、「恩物手業　フレーベル恩物並ニ手業ニ就テ理論的並ニ実際的研究」となっていて、「図画」は別に取り上げられている[27]。

1923年のランバス女学院学則では、学科の中に「手工　砂土、粘土、紙、布、材木、羊毛、葉、等の材料に関する智識、使用法、保存法等を研究し且児童教育に於ける其価値を知らしむ」と書かれている。「学科課程及毎週教授時数」が表になっていて、「手工」は第１、２学年とも２時間で、その内容は「粘土細工、紙細工、竹細工、木工等」となっている[28]。この年から２年の上に１年

の研究科が設けられていたが、1928年には修業年限が３年になった。その時の「保育専修部教科課程表」を見ると、手工は２学年の１学期に２、２学期に１であった。1936年には、社会情勢もあって２年に短縮されていて、手工は本科１年に各学期１となっている[29]。ランバス幼稚園では、本論集第52号でも触れたように「木工」が行われていた。この幼稚園の1923年に新築された園舎の平面図を見ると、「木工机」があり「大工道具」が置いてある部屋がある[30]。ランバスでの保姆養成では、幼稚園での「木工」が念頭に置かれていたと思われるが、1928年以後の手工の時間数から見ると、十分に行われていたかどうか疑問が残る。

東京女子高等師範学校の1934年当時の保育実習科規則では、学科目は「修身、教育、保育、理科、図画、手工、音楽、体操」で、毎週授業時数は計30で、手工は２であった。「各学科目ノ程度」では、手工として「紙細工　粘土細工　きびがら細工　簡易ナル木工」が上げられている[31]。時代が前後するが、1916年の皇后行啓の時の生徒課業の中に、手工実習、手芸実習が「技芸科第二部第四学年」で行われていて、教授内海静が手工を担当している。木工で「硯筥製作」「筆入製作」「折畳玩具製作」、金工で「銅柄杓製作」が行われていた[32]。

以上のように、保姆養成の場で、木工が行われていなかったわけではない。だが、週２時間で、いくつかの細工の中の一つであったことを考えると、材料や道具の知識や扱い方、技能の習得に関して、決して十分だったとはいえない。加えて、材料の準備や確保、道具の保管等の手間がかかることもあり、幼児たちには魅力的で、とても熱心に取り組める活動であるにも拘らず、多くの園で取り入れるような広がりは見られなかったと思われる。

おわりに

この後、幼稚園をめぐっても戦時色が現われ、物不足、節約が強調されるようになる中で、「木工」がどのように取り組まれていったのか明らかにすることを、次の課題としたい。

註

1．藤五代策『学校家庭手技及手工教材』、培風館、1929。
2．横井曹一『最新手技資料と其扱法』、東洋図書、1935。
3．木下一雄『幼稚園実際的保育学』、東京保姆専修学校出版部、1930、205頁。
4．森川正雄『幼稚園の経営』、東洋図書、1931、88頁。
5．同上書、174－176頁。
6．及川ふみ『幼稚園の手技製作』、フレーベル館、1932、91頁。
7．大阪市保育会研究調査部編『コロンビヤ大学附属幼稚園及び低学年級の課程』、フレーベル館大阪支店、1933、44－47頁。
8．日本幼稚園協会『幼児の教育』第31巻第7号及び第9号、1931、18－21頁及び9頁。
9．日本幼稚園協会『幼児の教育』第36巻第12号、1936、12－13頁。
10．堀七蔵『幼稚園保育の諸問題』、東洋図書、1934、330－349頁。
11．同上書、331頁。
12．同上書、344－345頁。
13．東京女子高等師範学校附属幼稚園編『系統的保育案の実際』、日本幼稚園協会、1935、解説。
14．同上書、20頁。
15．同上書、25頁。
16．松石治子『実際保育の要領』、大日本出版社峯文荘、1939、31－33頁。
17．手工研究会『手工研究』第213号、1938、12－18頁。
18．日本幼稚園協会『幼児の教育』第32巻第5号、1932、54－64頁。
19．日本幼稚園協会『幼児の教育』第34巻第7号、1934、3頁。
20．日本幼稚園協会『幼児の教育』第35巻第3号、1935、66－74頁。
21．日本幼稚園協会『幼児の教育』第31巻第6号、1931、10－11頁。
22．日本幼稚園協会『幼児の教育』第37巻第10号、1937、48－49頁。
23．基督教保育連盟『基督教保育』第26号、1938、13頁。
24．基督教保育連盟『基督教保育』第46号、1940、8頁。
25．全日本保育連盟『保育』第39号、1940、34－37頁。引用にあたって、ふりがなは省略した。
26．横井曹一『造形教育体系第三巻　造形教育教材論』、晃文社、1939、133頁。
27．聖和保育史刊行委員会編『聖和保育史』聖和大学、1985、60－64頁。
28．同上書、96－99頁。
29．同上書、125－129頁。
30．同上書、142頁。
31．東京女子高等師範学校『東京女子高等師範学校六十年史』1934、360－361頁。（復刻版、第一書房、1981）
32．同上書、135－136頁。

（引用文で、繰り返しに省略の記号が用いられていた場合は文字に、旧漢字は新字体にした。）